

日本体育協会創成期における体育・スポーツと今日的課題
－ 嘉納治五郎の成果と今日的課題 －
－ 第 2 報 －

研究班長 菊 幸一（筑波大学）
研究班員 真田 久（筑波大学），清水 諭（筑波大学），友添秀則（早稲田大学），
田原淳子（国士舘大学），永木耕介（兵庫教育大学），
村田直樹（財団法人講道館），山口 香（筑波大学）
担当研究員 伊藤静夫，森丘保典（スポーツ科学研究室）

目 次

はじめに：日本体育協会創成期以降における嘉納治五郎の成果から、
体育・スポーツの今日的課題を考える（菊）

1. 本研究の総括的な動機と目的	3
2. 2 年次における研究の論点と目的	4
1. 関東大震災（1923 年）後の競技力向上とスポーツ公園の造営 － 嘉納治五郎と大日本体育協会による復興への取り組み－（真田）	
1-1 関東大震災直後の嘉納と大日本体育協会の対応	5
1-2 全日本選手権大会の開催	6
1-3 オリンピック競技会（パリ大会）への派遣	6
1-4 スポーツ公園の誕生	7
1-5 嘉納の復興理念	10
1-6 関東大震災後のスポーツの発展	10
1-7 まとめ	11
2. 1940 年第 12 回オリンピック東京大会の組織体制と大日本体育協会 (1) 大会組織委員会の構成と大会への期待（田原）	
2-1 はじめに	13
2-2 第 12 回大会の組織体制について	13
2-3 大日本体育協会役員の見解	17
2-4 おわりに	18
3. なぜオリンピックを東京に招致しようとするのか： オリンピックと都市東京の 1940－1964－2016（清水）	
3-1 問題の所在	21
3-2 1940 年東京オリンピック招致の理念	21
3-3 1964 年東京オリンピック招致の目的	28

3-4	1964年東京オリンピックの現実	30
3-5	2016年東京オリンピック招致の意図	32
3-6	オリンピック招致と都市東京をめぐる権力編成：課題と未来	34
4.	嘉納治五郎の「体育」概念に関する覚え書き ～大日本体育協会の名称との関係性を視野に入れて（友添）	
4-1	はじめに	39
4-2	嘉納の体育概念を明確化するために	40
4-3	『柔道一班竝ニ其教育上ノ價値』にみる体育概念	40
4-4	『青年修養訓』にみる体育概念	42
4-5	『精力善用国民体育』と「体操」「競技運動」批判	43
4-6	『精力善用国民体育』における嘉納の体育	45
4-7	おわりに	47
5.	“柔道”と“スポーツ”の相克－嘉納が求めた武術性という課題－（永木）	
5-1	問題の所在	51
5-2	「武術性」の重視	52
5-3	アメリカ・ハワイの事例	56
5-4	おわりに	65
6.	嘉納治五郎が理想とした柔道－女性柔道に託したもの－（山口・溝口）	
6-1	はじめに	69
6-2	講道館女子部の誕生	69
6-3	講道館女子部の昇段	72
6-4	明治末から昭和初期の婦人柔道	73
6-5	女性の柔道試合	75
6-6	嘉納の柔道論と女子柔道	76
6-7	おわりに	77
7.	嘉納治五郎の思想と現代社会への連関について－体育・教育の視点から－（村田）	
7-1	緒言	81
7-2	術から道へ－原理の発見	81
7-3	体育観	82
7-4	体育批判	83
7-5	教育観	83
7-6	現代日本人社会の断章	84
7-7	国士の気概－現代に蘇らせるもの	86
	おわりに：2年次の研究成果と3年次に向けて残された課題（菊）	
1.	2年次の研究成果	89
2.	3年次に向けて残された課題	93
	資料 会議記録（森丘）	95

はじめに：日本体育協会創成期以降における嘉納治五郎の成果から、体育・スポーツの今日的課題を考える

菊 幸一（筑波大学）

1. 本研究の総括的な動機と目的

本研究の1年次の課題で述べたように、本研究全体を貫く動機は、日本体育協会が1911（明治44）年に嘉納治五郎を初代会長として大日本体育協会という名で設立されてから、2011年に創立100周年を迎えたことに始まる。講道館柔道の創始者であった嘉納治五郎は、1909年に日本人初のIOC委員となり、1911年に自ら初代会長として大日本体育協会を設立して、オリンピック大会への参加のみならず、「スポーツによる人間教育」「学校体育の充実」「生涯スポーツ振興」「スポーツによる国際交流」に尽力するなど、我が国の体育・スポーツの礎を築いた始祖の一人であった。彼の思想と成果は、もとよりこれまでさまざまに論じられ、今日なおその意義が問い続けられていることは周知の通りである。しかしながら、大日本体育協会から創立100周年を迎えた今日、戦前・戦後を通じて我が国の社会情勢が大きく変動し、国境を越えたグローバルな課題が噴出する21世紀社会においてもなお、彼の成果がこれからの我が国におけるスポーツ・ビジョンを構想していく上において何が、どのように有効であり、またそれ故に限界を持つものとしてとらえられるのかは未だに不明な点が多いように思われる。一方では、今日からみた戦前社会へのイデオロギー的批判から嘉納の成果をあらかじめその「限界」や「批判」から規定しようとする解釈がある反面、他方では、彼の成果を無批判に受け入れることによって、あたかも神格化された絶対的存在として彼の成果を肯定的にしか評価しえない態度も見受けられるように思われる。いずれも、今日における我が国の体育やスポーツの今日的課題と将来に向けてのビジョン構築との関係から、冷静にその成果の応用可能性と限界とを見極めることが求められているといえよう。

ところで、日本体育協会の設立をめぐる創成期とは、単に日本のスポーツがオリンピック大会に

出場するために、その参加条件として国内統括団体（NOC）を設立させなければならなかった時期だという表層的な画期としてのみ理解されるべきではなかろう。確かにそこには、種目別に発展してきた日本のスポーツに対してオリンピック大会参加を契機として、これらを組織的にまとめなければならないという制度的な必要性はあるものの、さらに重要なのは、そのために日本のスポーツをめぐるどのような理念や課題が示され、それがどのような社会的意義や可能性を、そして限界をもったのかを考える画期としてとらえることの必要性である。そのためには、当時の日本をめぐる社会的、文化的状況を十分に踏まえつつ、その歴史的な文脈のなかで嘉納治五郎なる人物が、個人としてだけでなく、その当時の歴史社会的文脈を生きる社会的存在として、我が国の体育やスポーツをどのように考え、何を期待し、何をなそうとしたのかについて明らかにすることが重要なのである。創立100周年を迎えた今日に生きる我々であるからこそ、その成果を冷静に分析し、評価して、これからの日本体育協会、JOCをはじめとするスポーツ統括団体や、ひいては日本のスポーツのあり方の参考とすべき今日的課題を析出する大きな手掛かりが得られるのではないかと考えたことが、本研究全体を貫く研究の動機である。

したがって、本研究の総括的な目的は、日本体育協会創成期における体育・スポーツを考えることが、なぜ体育・スポーツの今日的課題につながるのかを問題意識として共有しつつ、大日本体育協会の初代会長である嘉納治五郎の思想や考え方に基づく成果を、彼の生きた歴史社会的状況に照らしながら評価し（もちろんこの評価には、今日の状況からみた限界と可能性が含まれるが）、21世紀の体育・スポーツを推進する日本体育協会やJOCの組織としての、次なる100年に向けた今日的課題を明らかにすることである。そこで1年

次の本報告では、これまでの嘉納自身による、または嘉納に対する著作や研究論文等をできるだけ本研究の目的に沿ってレビューし、当時の社会環境および状況等の歴史的な文脈を踏まえた上で、その体育観・スポーツ観の本質に迫るべく嘉納の言説を以下のような観点から検討した。

- 1) ナショナルスタンダードとしての運動の仕方と国民体育との関係
…嘉納による柔術のスタンダード化と海外普及
…嘉納治五郎の国民体育
- 2) 嘉納の「柔道」概念にみる体育とスポーツ及びその歴史社会的背景
…嘉納治五郎の「柔道」概念に関する考察
- 3) <体操－体育－国民体育>の系譜におけるネットワークと組織化との関係
…日本における体操－体育の展開と嘉納治五郎
- 4) 女子柔道に対する考え方と国民体育との関係
…嘉納治五郎と女子柔道
- 5) 嘉納治五郎の成果をめぐる文献解題
…「嘉納治五郎」を知るための主要文献資料について

2. 2年次における研究の論点と目的

1年次における研究成果は、嘉納の体育観と柔道観との関係、国民体育のとらえ方と競技運動との関係、国民体育につながる女子柔道への考え方、伝統としての柔道とインター・ナショナルな普及との関係、等々が主に議論された。その結果、(1)依然として競争の結果として頂点をめざすことと国民体育の普及とが具体的にどのような関係や矛盾を伴うものであり、それは調和のとれた健全な国民体育の普及と競技スポーツの発展とをどのようにもたらすものであるのかは、1年次の研究成果から十分に明らかにされたとは言えなかった。また、(2)それとの関連で嘉納の体育思想における「体育」概念とはどのような普遍的性格を持ち、これとオリンピック運動がどのように関係するのかについては、特に1940年の「幻の

東京オリンピック」招致に対する嘉納の態度や大日本体育協会の姿勢から明らかにしていく必要がある。その際、(3)当時の世相や社会情勢との関連から、嘉納の「精力善用」に代表されるプラグマティックな思想的性格がどのような結果や解釈を生み出し、どのような外圧との軋轢や抵抗を生み出したのかも考察しなければならないだろう。さらに、(4)1年次に明らかにされたインター・ナショナリズムの文脈からみた嘉納の柔道観の特徴を、対外的には伝統的な武術重視の観点から説き起こしつつ、対内的には女子柔道における形の重視との関係からも見ていく必要がある。

以上のような1年次の研究成果からみた論点の整理から、2年次においては以下に示す研究の目的とサブテーマが設定された。

- 1) オリンピックに向けた競技力向上と国民体育振興との関係を明らかにすること。このサブテーマとして、(1)関東大震災後の競技力向上とスポーツ公園の造営、(2)1940年第12回オリンピック東京大会の組織体制と大日本体育協会、(3)なぜオリンピックを東京に招致しようとするのか、を取り上げる。
- 2) 嘉納の体育思想における「体育」概念を大日本体育協会の名称に込められた意味から明らかにすること。このサブテーマとして、(4)嘉納治五郎の「体育」概念に関する覚え書き、を取り上げる。
- 3) 主に嘉納の柔道思想における武術的性格の位置づけから対外（インター・ナショナル）的、対内（ナショナル）的な柔道とスポーツとの関係の特徴や課題を明らかにすること。このサブテーマとして、(5)「柔道」と「スポーツ」の相克、(6)女性柔道に託された嘉納治五郎の理想とした柔道とは何か、を取り上げる。
- 4) 現代社会の世相に関連した嘉納の体育・教育思想の意義と課題を試論的に展開して見ること。サブテーマとして、(7)嘉納治五郎の思想と現代社会への連関、を取り上げる。